



2015・6・7

SORA 61号

京都 天谷翔子

はくれんの空へ石段のぼりけり
大石忌和紙のランタン灯しけり
花の山へと通ひ路の花を抜け
海と空夜はひとつに仏生会
囀や石碑の文字をたれも読めず

千葉 原友子

さくら満つ右手左手つながれて
歯並びの美しき少年みどりの日
潔し一番風呂の菖蒲の香
空洞も重さのうちや秋田露
また一枚ハンカチの木の花が散る

福岡 田代貞枝

山の井は神在す処苔の花
千本桜花びら攫ふ夜の風
ものの芽や薄紙に透く京土産
たんぽぽや手足はみ出すべピーカー
古民家の礎石の太し山笑ふ

山梨 野畑さゆり

門司に母誘ひし日や春の潮
囀に包まれ父母の墓域かな
喜寿傘寿そろふ遠忌や山笑ふ
川底に陽のあたりけり蝌蚪の紐
信玄像御身拭ひて春逝けり

福岡 亀井紀子

さへづりや肩借りてゐる夫の父

緑風や洗濯物は二竿に

天空も縄張りありて初雲雀

限りある命かみしめ聖五月

病む父の深き吐息や走り梅雨

福岡 白水良子

花ふぶき聖堂を出る子の柩

春光の届いてゐたる子の遺影

リボンの子灰を賜はる水曜日

聖枝祭棕櫚の葉先に刺されたる

菜の花や軍神の家ああたり

東京 遠山のり子

指先に移り香かすか茶摘せり

大木の向かう青空鯉幟

大太鼓ひびく薄暑の寺詣

つり橋の下は清流花辛夷

境内を婚礼の列五月来る

東京 山田正子

孔子像花大根の中に佇つ

小流れの流れを止めし春落葉

廃校のはなびら欠けしチューリップ

黒板の日直消して卒業す

サンプルの蠟のレタスや四月馬鹿

兵庫 石川 叔子

普請終へたる百畳に風薫る

漁舟霞となつてしまひけり

春立つや伝ひ歩きの五歩十歩

水切を競ふ父と子風光る

腰おろす石の温みや桜狩

東京 今井 春生

さくらさくら抱かれたる嬰が手を伸ばす

一升餅背負ひて一歩つばめ来る

蘆花邸の玻璃戸にゆがむ桜かな

珈琲の香り蔵より柳の芽

珈琲の香や天井に水陽炎

福岡 吉村 摂護

桜散る中空睨む警備官

玄海を茅花の風がゆらしけり

麦秋を新幹線が切り裂けり

千枚の田へ順送り田水張る

代掻きの落ち水高き千枚田

東京 古川 夏子

囀や邂逅の日の木々高し

満々と浄水場の芽吹きかな

雪割草一輪づつの私信かな

嘶きをまとひて来る青嵐

約束はハンカチの木に託しけり

大阪 青木 朋子

膝に来て目をつむる猫夕ざくら

農婦の手届く枝ぶり花りんご

残雪の山や授粉の手の止まず

トンネルを五つ抜けたり今日立夏

標識の白の輝き夏来たる



空作品抄
柴田佐知子抽出

走り根をまたぐ走り根三鬼の忌

遊ぶごとパン奪ひあふ雀の子

みづうみの端に疲れや桜の実

白薔薇や聖女と言ふは味気なし

行員は行員の顔どんたく隊

土器の大いなる弧や山法師

水軍のひそみし浦や桐咲けり

服違へ転人生の新学期

頷いてゐし母眠る春炬燵

楽になる涙もありて朧かな

浦町は垣をつくらず軒菖蒲

初夏や羽根を拡げて飴の鳥

楠若葉赤子氏子となりにけり

案内図のここ花冷の現在地

田代民子

柴田志津子

戸栗末廣

宮井知英

吉田 菫

松本 司

深川淑枝

秋 千晴

林 徹也

高倉和子

千波 悠

永淵恵子

田中とし江

田岡千章



亀鳴くや都大路は鬼棲むと

故郷の堰ぬるぬると夏休み

子の後の風呂に萍浮いてをり

みな脚の弱くなりたり彼岸かな

春雷や母は弱音を吐かぬまま

地下街を歩けば春の靴が鳴る

とりけもの哭いて静かな涅槃絵図

亀鳴くを聞きたく石人佇めり

春夕焼地球の海はひとつづき

蝸壺の口は海へと夏兆す

鞆韃や人妻奪ふ恋をして

後退りしつつ畝切る春の雲

うたた寝の闇より湧きし海月かな

犬の名を尋ねて呼べり花の下

はらからに老い深まりぬ座禅草

母のやうな母になりたし花水木

花吹雪息つまるかと思ふほど

織田高暢

ふじの茜

小林朱夏

田代貞枝

苑実耶

田坂能雄

松田明子

矢野百合子

森俊人

井上和子

小谷一夫

原友子

あさなが捷

栗原京子

野畑さゆり

仲里奈央

遠山のり子

鈴の鳴る子猫の玩具暖かし

新しき靴嚙を浴びにけり

満開の花を離れて父母のこと

春風や会へる気がする丘の上

散骨は海がよろしと桜守

菜の花の色押し流す筑後川

行く鴨のあつまつてゐる潮だまり

湯の中の若布にもどる海の色

紫木蓮ことば貧しく枯れにけり

制服のまだ身にそはず今年竹

山笑ふ窓の大きなダンス場

親指に花屑たまる仏足跡

みどりさす宮に神馬の控へをり

なごり雪分けて列車の灯の疾し

ただ一人乗せて渡船のあたたかし

手放して神にゆだねて花吹雪

太りゆく梅の実眺めお縁がは

押田裕見子

酒井みち子

西住三恵子

白水良子

田邊豊子

吉村摂護

えとう樹里

山田正子

わたなべ漣

石川叔子

荻 悠子

天谷翔子

小川 涼

清水量子

橋本知笑

乾 有杏

三輪敏夫



雨のあと筍掘りに子をつれて

曲屋の建具一式夏めけり

春の陽をベツド一杯浴びにけり

袈裟などは持たぬ持たぬと仏法僧

あをあをと月の欠けゆく春隣

うららかや手よりこぼれし金平糖

薫風や園児はすぐに走りだし

ミルフィーユさくさく桜咲きあふれ

前掛をはみ出す露をかかへ来る

外海で待機する船春の霧

シーサーに残る弾痕董咲く

五月晴れ母は偉しと父が言ひ

妣の香を心ゆくまで柏餅

明易や父の遺せし農耕記

耕して畦でしばらく話しをり

植田 洋子

上川 いつ子

長末 不断

犬丸 勝子

古川 夏子

今井 春生

立花 一枝

青木 朋子

横田 敬子

井上 義郎

村上 二三

村上 典子

日高 孝

山口 弘子

森 真二

空作品評

柴田佐知子

服違へ転入生の新学期

秋 千晴

遊ぶごとパン奪ひあふ雀の子

柴田志津子

雀の子は親雀とあまり見分けがつかないが、可愛く危なっかしい様子でそれと知れる。親離れをしたばかりで、怖さがまだ分らないのである。すぐそばまで来て、撒かれたパンくずを数羽で取り合っているのだ。命をつなぐ食べ物懸命に奪ひ合っているのだが、人間から見ると遊んでいるように思えるのだ。

白薔薇や聖女と言ふは味気なし

宮井 知英

一読、反射的に、与謝野晶子の〈柔肌の熱き血潮に触れもみで寂しからずや道を説く君〉の歌が心に浮かぶ。

純粹高潔なる聖女が、〈味気なし〉というにべもない一言で、バッサリと容赦なく切られてしまっている。与謝野晶子の歌と共鳴する部分はあるが、取り付く島もない掲句の素っ気なさにある種の爽快感を覚える。

親の転勤などによる突然の転校で、制服を用意する間もなかったであろう。千晴さんのすなおな視線が捉えた素直な景である。転入生の事情など考えさせる奥行きもある。

顔いてみし母眠る春炬燵

林 徹也

母上はおいくつであろうか。私の母は今九十三歳である。まさにこの句の通り、すぐに眠るので可笑しくなった。〈春炬燵〉であれば尚更であろう。作者の眼差しが優しい。

染になる涙もありて朧かな

高倉 和子

悲しい時に流れる涙だが、涙を流すことによって何か思き物が落ちたように、あるいは気抜けしたように心持が変わるときがある。これは女性に多く見られる心理なのではと思う。女性は深く悲しんだあと、心にけじめをつける力が強いのかもしれない。

空集

柴田佐知子選

淡墨ざくら晩年のいろと見し 宮崎 田代 民子
走り根をまたぐ走り根三鬼の忌

惜春の正座で射貫く四半的
故郷を遠くにおきて草の餅

ジヤスミンの憂き香どこへも行かぬ日々
衣更へてうなじの老いのつまびらか

遊ぶごとパン奪ひあふ雀の子 福岡 柴田志津子
干魚ですます昼餉や麦の秋

老人の健康体操花は葉に
阿蘇山のおとなしき日や夏薊

青桐や答ふる前の息深く
舟つなぐ杭の林立風光る

明け方の空はむらさき猫の恋 兵庫 戸栗 末廣
自転車の通るたび揺れ雪柳

剪定の鋏を鳴らし終はりけり
交はりて一つになりし蝻のみち

花冷や新幹線の横顔も
みづうみの端に疲れや桜の実

神の座は咲き満つる中五月来る 糸田 宮井 知英
初節句年寄りの座に据えられて

正論を言うて淋しきジギタリス
白薔薇や聖女と言ふは味気なし

臥す母に夜のすぐ来る桐の花
死の恐くないとは嘘よ不如帰

あたたかや全身丸き鳩サブレー 粕屋 吉田 菫
胎内に小さなほとけ花馬酔木

均されし土に足跡仏生会